

玉川教会たより

「道標を信じて」

玉川教会牧師 衛藤満彦

「この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。」(使徒言行録2章39節)

2024年のペンテコステを迎えました。今年のペンテコステ主日礼拝では役員の任職式が行われ、教会にとって大切な働きを担って頂く方々が与えられたことに感謝する時となりましたが、教会に大切な働き人が与えられる事は、まさにこのペンテコステの出来事から始められていると思うのです。

ペンテコステに起こった出来事については使徒言行録2章に詳しく書かれていますが、そこに書かれていることはその描写だけであり、本質については詳しく書かれているわけではありません。しかし、その言葉を理解するためには信仰の眼差しを持ってみていく他にはありません。確かにそこに書かれているのは不思議な言葉ですが、間違いなく神さまの大いなる奇跡の業であり、イエス様を通してなされていた約束の成就でもありました。

神さまとの約束は聖書の中でも何度か人間との間に交わされてきました。創世記の始めにある天地創造の物語の後にはアダムとエヴァとの間に約束が交わされ、その後のノアの時代にも洪水の出来事の後には「虹の約束」が交わされています。それらは一方的に人間に益がもたらされるだけのものでしたが、ただ、その約束の大前提には「人間が神さまを信じること」が置かれていました。神さまを信じることで人間に必要なものは与えられるはずだったのです。しかし、この大前提を人間はその歴史の中で何度も覆してきました。旧約聖書に於いてイスラエルの民は神さまを裏切り続け、全く違う存在を神としてしまうのです。しかし神さまは、裏切られても約束を与え、また裏切られても新たな約束を与えて下さり、愛の業としてどんな時代の者たちにも「道標」を立ててくださったのです。

ペンテコステの出来事の前にも、弟子たちはその「道標」を見失いかけていました。それまではイエス様の横にいて話を聞いてうなずいたり、感心したりしていただけの弟子たちの前にイエス様の十字架の死という厳しい現実が起きました。その死から復活されたイエス様との出会いが与えられて、今度こそ見失うことなく、逃げることなくついていこうと決めた矢先にイエス様は天へと昇って行かれました。弟子たちにすれば「今度こそは」という思いが裏切られたような気がしたことでしょう。しかし、そこに「聖霊」が与えられました。神さまの約束の成就として「聖霊」が与えられ、彼らは「聖霊が語らせるまま」に語り始めたのです。それまでただイエス様の横にいただけの彼らが急に神の福音を語り始めていくことを目にした者たちは驚き、疑い、不振といった感情を抱きました。しかし、その語られる言葉は確かで、信じるにたるべきものであり、人々を導いていく「道標」となっていくのです。「聖霊」は神さまがわたしたちがこの世で歩んで行く時に迷うことがないように与えられた「道標」であり、またわたしたちに必要な「導き手」として与えられた存在です。この「導き手」を信じて新たな歩みへと進んでいきましょう。